

時代
小説
自選集
第三卷

赤穂浪士下

大佛次郎

大佛次郎時代小説自選集

第三卷

赤穂浪士 下

昭和四十五年三月十日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

” 五三〇 大阪市北区野崎町七七

” 八〇二 北九州市小倉区明和町一の二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

赤穂浪士（下）

装丁・題簽
見返し繪
佐中
多村
芳岳
郎陵

武士道

「来たか？」

京から馳せくだった堀田隼人の知らせを聞くなり、千坂兵部はこう叫んだ。ぎょうろりと大きな目が動いて、やがて一途の光を点じてじいっと止まった。隼人は、兵部の顔を見ながら、京にいた頃狭い裏町の道具屋の店で見た古い面を思い出した。一筋一筋のかたい線が、見てくれば単調でいて、じっと見詰めている内に、その裏に圧縮して隠している無限の感動を、浮き上らせて来る不思議な細工を。

兵部の顔を、瞬間に石にしたようにかたくしていた線も、やがて、おもむろにゆるんで行った。ただ、大きい目に添った光のみが、それから暫く消えないで、話の間も、ずっと遠い何かを見詰めているような感じを与えた。

京を何日に立った？ どこで、大石を追い越して来たか？ 大石の連れはいくたりいたか？ 道中をいそいでいる様子は見えなかったか？ 短く鋭い口調でこう尋ねる。

隼人は、一々、これに答えた。

「すると……途中に何事もなければ、江戸へ着くのは明後日の夕方であろう？……今夜が小田原、明日が神奈川泊り。そうだ、明

後日の夕方だ。どうだ？」

「その計算になりましたよう」

「むむ」

兵部は、うなずいて、

「すると、私もあさっては、大石内蔵助の顔が見られるわけだな」

とはじめて笑顔を見せた。

隼人は、疑っていた。

「大石は何のために出府いたして来たもので御座りましか？」

「さればさ」

兵部は機嫌よく、

「他人のことだ。私にわかる筈がない」

「が、噂の……」

「敵討ちのことか？ まあ、その目的で来たものではなからうと思うな。だが、関係ないこともないだろう。油断はならぬ。しかし、これは、自然に世間に知れるまで他言は無用だぞ。わかったらその時のことで……それまでは、聞かせないで置く方がいい場合がある」

「畏まりました」

「いや、御苦労だった。ゆっくり休んでもらおう」

兵部は隼人をさがらせると直ぐ用人を呼んで、小林平七を連れて来いと言いつけて置いて、自分は火鉢に片手をかざしたままの

姿勢でじっと考え込んでいた。手が熱くなると裏をかえすだけで、そのほかは眉も動かさない。秋の日は、明り取りの窓の障子を染めているだけで、部屋のはなは静かだった。

(どうせ、知れずにはいまい)

兵部の考えは、ここへたどり着いていた。

隠して置いても大石の出府は、噂好きの市民の好奇心を必ず刺戟して、近頃鎮まったように見える敵討ちの噂が再燃する。それはいいとして、上野介どののみならず、お上までそのつむじ風の中に巻き入れられることであろう。悪いのは、それであった。これが上野介どのの屋敷替えのことが円満に行っていたらよいのだが、この秋の初めに御公儀が取った措置は上野介どのに極めて不利なことになった。上野介どのに下されたのは、場所もあろうに本所松坂町のもと松平登之助のいた屋敷で、これは御公儀御用部屋の内でも非柳沢派の勢力が據頭して柳沢吉保の専断を許さなかったせいにもよるが、世間の噂では御公儀も「上野介どのを討ちよいようにした」と噂するし、上野介どののもとよりお上も、このことがあってから極端に神経的になっていられるのである。

この時期に大石の出府のことを聞いたならば、無論ひととおりこのことで済もうとは思われないのであった。出来るならば、隠して置いて、自分の手一つで全部を処置したい。これは、望んでも叶いそうにもないことだった。兵部の心持は、暗くけわしくなってきただけだった。

小林平七は折悪しく他出していたので、日が暮れて暗くなって

から兵部のところへ来た。兵部は食事をしていたが、

「待て」

といって、平七をそれへ坐らせた。

皿の上には、かますの乾物がのせてあるだけだったが、これは肉のいいところは大方膳の傍に坐っている黒猫が食べてしまった。主の箸は、肉をさいては、猫の鼻さきへ置いてやるのである。主は煮出した番茶を飯にかけてさらさらと食事を終えた。

「や、お待遠う」

「なにか……？」

「むむ」

主は、話の順序を考え込んでいるらしく、煙草をつまみながら、暫くだまっていたが、

「例の連中はどうだろう？」

「……………」

「役に立ちそうか？」

これは、兵部が新規につのつて抱えた腕達者の壮士達のことだった。壮士達は長屋をもらって、一日中武芸をねっていたのである。

「左様……………」

平七は、頭の中でかぞえていたが、
「皆伝以上の者は十人ばかりおります。どちらへ出しても辱しめらぬ者のように存ぜられますが……」

「十人」

と頷いて、

「軽率の者はいけない。どちらかといえば鈍重で、ただ御奉公に誠意のある者がほしい。批評なしに命令に従う者達だ。死ぬといったら、なぜ？」と問うことなしに、甘んじて死ぬことの出来る者達だ。新参の人間にこれを求めるのは難しい。君は、どう思う？」

平七は、この問いに逢って当惑したような顔色をした。その様子を認めて、主は心に微笑した。これは、この、自分のことだけしか知らず、他人もまた自分と同じようにしか考えていない、と、かたく信じている素朴で一本気な相手に、いささか無理な問이었다ようである。可愛らしい男だ。兵部が今、求めているのは、小林平七のように、主人のためには文字通り水火を辞せぬ、素朴な気象を持った人間が正しくそれだった。

「小林」

と、厳格に改まった口調で、兵部は言い足した。

「いよいよ赤穂の浪士達が松坂町へ乱入するかも知れないのだ。それについて、私は君をたよりに思っている。是非とも君にあらへ行って、万一の時は働いてもらいたいのだ。君のほかに家中の者を選んで置いたが、新規召抱えの者の中からだれを連れて行くかは、君がきめてもらいたい。あまりこのことが世間へ目立つのはどうかと思うから、人数も必要の限度に止めて置く。それだけに君達の仕事は苦しかろうが……お上御孝道のためだ。やってくれるな」

「仰せまでもなきこと。家門の冥加に御座りまする」

「……………」

兵部は、輝いてうれしそうに、平七の悍ましい顔色を見詰めている中に、深い感動が身内にのぼって来たのを感じて、処理がつかぬ気持で無言になっていた。

「して、いつ頃から……………」

と、平七はつましく尋ねた。

「明日。私から一同に話すつもりでいるから、それから直ぐ、あちらへ移ってもらいたい。用意の万端は他の者にさせる。君達は身柄だけで気楽に本所へ行ってもらいたいのだ。今夜はこれ desirable」

平七が、来たときと同じように黙々とさがって行った後に、兵部は、ひとりのこつて、深沈とした夜にどこからとなく昇って来る虫の音を聞きながら、先刻から胸をひたしていた沈んだ感動とたたかっていた。

お上の御孝道を立てる……ただ、それだけである。しかし上野介どのが、小林達にとって何であろうか？ 世間の悪声は別として、愛すべきかれ等が一命をなげうって護るだけの因縁がどれだけあるのか？ いや、そうではない。そう考えるのは悪いことだ。こう出来ている世間なのだ。これだけの因縁から、甘んじて死につくことの出来る人々を家来に持つ上杉こそ、万々歳と考えねばならぬのであろう。この生贄があつて初めて、武家社会の秩序が保たれる。

次の日の夜、付人達^{つひびと}は本所松坂町の上野介の屋敷にひそかに移った。越えて翌日の朝、兵部は編笠に面をつつんで飄然と屋敷から出た。これは、今日こそ江戸へ入る筈の、敵手大石内蔵助を迎えるためだった。

兵部は、泉岳寺へ行つて、冷光院殿浅野内匠頭^{あさのなかむね}の墓前にたたずんだ。この地下に眠る人の、短く不幸に終った一生のことが考えられた。墓前に花も新しいし、火は消えていてもよくない線香の灰が石の上に残っている。大方、これは江戸に残っているものと家臣達が手向けたものであらう。兵部もこれに、寺男に携えさせて来た菊の花たばを置き、線香を捧げてから歩き出した。

秋の墓地は、すいた木立越しのななめの光を受けて、静かに明るい。落葉をたく煙が、ひっそりと澄んだ空気に、もやのように低くたなびいているのだった。

兵部は、そこから海づたいに品川の宿の方へ歩いて行つた。この道に来ることは確実であつても、一体いつ頃通るかわからない相手である。また、会つて話をするわけでもなければ、ただ一応顔を見て置きたいと思う漠然たる動機から出て来た。それも見て置く必要があるというわけでもない。ただ、これまで一度も見たことのない敵手を見る。それだけの希望であつた。

暫くして兵部は、また道を引き返して来て、高輪^{たかね}の大木戸にある宿屋の縁台に腰をおろして一服はじめていた。

出て行く人、見送る人、また入って来る旅人、出迎えの者、どの宿屋も賑つていた。その中に兵部の注意を惹いたのは、野袴^{のびさ}を

はいた二人連れの若い侍だった。誰かを迎いに来たものらしく、先刻から盆を挙げながら八つ山の方角から来る旅人を頻りと見ているのである。兵部が考えたのは、ひょっとこの二人が赤穂の浪士で、ここで内蔵助を待っているのではないか、ということである。

そう考えて観察していると、どうもこの最初の臆断があつていように思われるのみか、一人の羽織の襟がすべつた時、ちらとのぞいて見えた衣服の紋が、兵部には浅野家の定紋鷹の羽だったように感じられた。

そこへ、かねて言い付けて置いた堀田隼人が来た。

「あの連中も迎いに来ているのじゃないかと思う」

兵部は、そつとささやいた。

隼人も、ちらと振り返つて見たが、顔色を動かして答えた。

「御推察のとおりです。あの左手にいたのは武林唯七という男です」

「ほう……では、いよいよ来ると見えるな。昨夜泊ったところから飛脚でも知らせて来たものと見える」

「こういうながら兵部も、緊張した語氣になっていた。」

「しかし、君は、あの男をどうして知っているのだ？ 見とがめられることはないのか？」

「服装も変わっていますし、多分先方も覚えていないだろうと思います。ほんの一度会っただけの男ですから」

隼人は、こう答えながら、用心深く武林の方へ背を向けて、顔

を見られぬようにした。

こうして小半刻もまつ間もなく、向うの二人のところへ続々と浪人風の武士が集まって来て、やがて十人以上になって、酒を運ばせるやら縁台を寄せるやらして、にぎやかなことになっていた。

兵部は、いかめしい顔付で、煙草をくゆらしていたが、「なかなかさかんだな」

と、ひややかに呟いただけだった。

間もなく八つ山の方から、六人ばかりの同勢で入って来た旅の武士があった。例の連中がいそいで立ち上り、又隼人が「あの二番目の男が大石です」とささやいてくれる前に、兵部は、小柄でふとって暢気そうな内蔵助の姿をはっきりと認めていた。そして、内蔵助が出迎いの者に囲まれ一々挨拶している間中、無言で、笠の蔭に目を光らせてじいっと見詰めていた。

隼人は、かたわらにいて、その人がどういう風に感じているか知リたかったが、兵部の顔付はいつもどおり気むずかしく見えただけで、心持のことは遂に読み取るわけに行かなかった。

内蔵助は公然と江戸へ入って来た。忽ちこのことが世間の噂にのぼった。江戸では待ちに待った千両役者がいよいよ花道に姿をあらわしたように思っ、て、間近い事件の展開に刮目^{くつめく}しているのである。

兵部が憂いていたことは、遂に起こって来た。

綱憲から急に呼び出された時、兵部は、来たなと思つて不機嫌になった。

綱憲は、元來病身で、すこし風邪の気味があつて四、五日来床についていたのだが、兵部が伺候すると、待ち構えていたように、近う寄れといつて、人払いをいいつけた。

「兵部、浅野の浪士達が出府いたして来たことを存じているか？」
「存じております。大石内蔵助のほか五名ほどの人数に御座ります」

兵部の返事は如何にもはつきりしていた。

綱憲は、それが不快だったらしく顔をしかめて、暫く無言でいたが、

「かねて、申しつけて置いたことに、手ぬかりはなからうな」

「御安心なされませ。小林平七ほか十四名の者をあちらへ差し向けて置きまして御座ります」

「十四人？ 人数が不足ではないか？」

「しかし、これは、噂のようなことは先ずないことで御座りますし、よしあるにせよ、これだけの人数ならば、御信頼遊ばされて宜しかろうと存ぜられます」

「したが、むこうは何人来るかわからぬことではないか？ 浅野の家来は百人や二百人ではなかつた筈だが」

「いや、恐れながら、かようなことは人数の多い程成就^{じょうじゆ}困難^{くわんなん}となります。ましてや、御政道あきらかに天下泰平の今日、左様な徒党を作つてお上お膝もとを騒がせるなど、誰が考えましても許さ

れることのない以てのほかのこと。大石にたとえ不逞の志が御座りましようとも、天下に聞こえた知恵者だけに、まずまず左様な愚なことは致しますまい」

「それは、そうかも知れぬが……」

網憲は、まだ愁い顔でいた。

「天下泰平というが、父上に憎しみを掛けてひそかに大石達を庇護している人々もすくなくないことだ。柳沢どのがたのみにならぬことは過日の屋敷替えのことでもわかる。父上は、あの御気象ゆえにお味方がない。私一人をおたより遊ばされているのだ。兵部、これをよく、考えてくれい」

「勿体なき仰せに御座りまする」

「私はこの家の者となったが、骨肉の父上があのようにお悩み遊ばされているのを、子として、なんで見捨てて置けよう。兵部……私は父上を屋敷へお迎えしたいと思っているのだ。父上の御安心のためにも、また私の安心のためにも、それが一番いい、と思うのだが……たのむ、そのようにしてくれい」

「……………」

兵部は、人間的ないたましさに打たれて暫く無言でいた。枯れた顔に微かに血が潮した。

「それは……それは、なりませぬ」

押し切るようにこう答えた。

「ならぬ？」

「なりませぬ」

強い言葉でぐっとおさえた。

「なぜじゃ、なぜ、ならぬ？ これ、兵部、これも私への忠義の一つじゃ。そちは、それをならぬというのか？」

網憲はいつか身を起こして膝に拳をかためていた。

真青になって烈しい光を目に宿している網憲と、ひくく頭を垂れていながら、冬の日だまりの枯れ木のように微塵ゆるがぬ兵部とを置いて、部屋の空気は凄いような沈黙に閉ざされていた。

この押し付けるような無言の境を、網憲の息が短くせわしくきざんで行くのを、兵部は聞いていた。

「殿」

と、顔をあげた。

「お家のために、それだけはなりませぬ。兵部が、御当家御代々への御奉公の途は、そのほかには御座りませぬ」

必死の気魄が、この時兵部の貌に閃いて見えた。

いう意味は網憲の胸にもよくとおった。兵部は、網憲が「自分への忠義」といったのに対し「御当家御代々への御奉公」といつている。兵部は、当主の網憲一人に仕えているのではない。連綿たる上杉家の代々、その歴史と名譽とに仕えている。いや、もっと、はつきりといえば「家」に仕えていて、一人の網憲に仕えているわけではない、というのである。

網憲は、瞬間にかッとしたりしく顔色をかえたが、この強い氣勢は僅かにあらわれただけで、忽ち消えた。くじかれた心をかくそうとして、わざと烈しく、まるでたたきつけるように、

「立て！」

といって、急に横を向いた。

兵部は直ぐと立たなかった。暫く無言でいたが、

「小林達は可憐なものに御座りまする。かれ等を御信頼遊ばされませ」

といって静かに立った。

襖の外に、同じ家老職の色部又四郎安長が控えていたが、心配そうに兵部を見上げた。

兵部はこれにうるんだ目を向けて会釈して廊下へ出て行った。

又四郎は、ひょっと兵部が切腹をするのではないかと疑って、自分も立って、溜りの間まで追って行った。

綱憲は、もどおり横になって目を天井に向けてあきながら、にわかに襲って来た寂しい気持を一々丹念に噛みくだくようにして抑え付けていた。今は、激昂も落ち、兵部の言葉は一語一語石のようにつめたく固い真実となつて、胸に思いあたるのである。

兵部のいったとおりであろう。養子となつて来たからは、家を先にして私情を後のものとせねばならぬであろう。しかし「家」とは？ この、骨肉の情愛にまで立ち入って、これを贅に求め「家」とは？ 兵部の意見を正しいとしながら、綱憲は、漠然とこの疑いを抱いた。

だが、やがて又四郎が引き返して来た時、綱憲は、

「兵部を見てやれ」

と、短くいった。

又四郎は喜んで立つて行ったが、この言葉を伝えがてら、この際禍根を絶つように大石を暗殺してはどうかと、自分の意見を話した。

兵部は、首を振ってきつぱりとこれを拒んだ。

「そりゃアかえって、こちらから喧嘩を仕掛けるようなものだ。

そのためにかえってかれ等の結束がかたくなるだろう。あるいは大石の方では、それを待っているのじゃあるまいか？ あまり悠悠と構え過ぎているように思われるのだ……相手に廻しては肚の知れない気味の悪い男さ。まず何もせずに、遠くから見ているよりはかはあるまい」

こういって、いつものように考え込んだむずかしい顔付に戻った。

岩瀬勘解由、相沢新之助の兩人が、殆ど夜も寝ずに江戸へ歸つて来たのは、内蔵助が堂々と旧藩士に迎えられて入府してから三日ばかり後のことであつた。二人は、伏見の奉行所へ行って、内蔵助から旅行の届出があつたのを知ると、今更のように狼狽して、その足で直ぐ東へ下つた。二人が恐れていたのは、自分達の江戸へ入る前に赤穂浪士の復讐が決行せられることである。また、よし、そのことがなかったにしろ、隠密としての今度の失態は、まことに面目のないことで、どんな咎めを受けても仕方がない話だったのである。

道中も、その話よりほかはなかった。江戸へ近づくとつれ、行きあう旅人や旅宿の噂ばなしに聴^{きこ}耳を立てていたが、先ず、復讐のことがないらしくても、江戸へ入るまで不安は残っていた。気短かな相沢は、いつの間にか、勝手にしやがれという捨鉢な気持ちになっていて、岩瀬を困らしていた。

「御用人に会って、どういう風に話したらいいのだろうか？」

「さればさ。私は、こう考えてみる。どうもあの男にかたきを討とうなどというけな気な心持はないと思うのですね。それを、うまく話したらどうだ？」

「さあ、そうだろうか？」

「考えてみれば、かたきを討つくらいなら、こうおおつぴらに江戸へ来る筈はない。私たちを出し抜いたように伏見の役所も出し抜いて、こつそりと来る筈だ。それでなけりゃ出来る話ではなからうではないか？」

「まあ、そりゃアそうだが……大丈夫かな」

「大丈夫でなかったら、その時ヒッ込むだけの話だ。けれど、なんといつてもお家には直接の関係はない事柄だし、お咎めがあつてもたいしたことはないだろうから、はやまったことはしない方がいい。話はおれにまかして置いてくれ。けれど、兎に角大石の宿所ぐらい知っていないと具合が悪いが……江戸へ着いたら、すぐ、それを探すのだ」

二人は、割にわけなく大石の宿所を知ることが出来た。芝三田松本町の日傭頭前川忠太夫の家である。忠太夫が、浅野家に多年

出入りしていたので、その関係からこの家に宿を取ったらしかった。内蔵助は、この家において旧藩士の訪問を受け、相変わらず平和で、気楽で、ちつとも秘密があるようにも見えず、機嫌のよい日々を送っているのだった。

「大丈夫だ」

岩瀬は、こう言つて、相沢に力をつけ、用人曾根権太夫の私宅を訪ねた。

「どうした？ 殿が、御立腹になっておられるぞ」

権太夫の言葉は、二人を驚かした。

岩瀬は、内蔵助の放蕩振りを一々報告して、世間で考えているように復讐の計画など決して持っていないことを熱心に話して、今度の東下りでも、大学殿のお取立て運動が主眼らしいから、御前へも左様御披露願いたい、といった。

「そりゃア一応お取り次ぎするが、殿は昨日大石の出府のことを聞いて戻られて、あんた達の緩急をひどくお怒り遊ばされ、帰り次第ひまをやれと仰せられている。だが、そう心配したものでもないことは、向後手柄があるまで一時ひまをやる……と仰せられる」

権太夫は、奥歯に物のはさまったような口をきいて、じろりと、意味ありげな目付で二人を見た。

「わかるか？」

こういわれて、岩瀬は膝を打たぬばかりにうなずいた。
「畏まりました」

「むむ」

權太夫は満足げに目を笑わして、

「それでいい、今日から、あんた達は当家の者ではない。御紋のついたものは、一切まとめてお取り上げになる。それも承知だろうな」

といやに念を押すようにいった。

内蔵助は誰にも機嫌よく会った。誰もこの人を咎めることは出来なかった。人徳というのであろう。会って話している裡に、この人なら任して置いて大丈夫だと自然と考へて来る。そのためか険しくなっていた江戸の同志の焦躁も、いくらかやわらげられたように見えた。

内蔵助が江戸にいる間に、同志の寄り合を催したのは、来て一週間目の十一月十日のことだった。

亭主の前川忠太夫が家の者に命じて、外に怪しい者の近寄るのを嚴重にいましめて、同志の頭立った者のみ十人奥に集まった。

奥の間には内蔵助、奥野将監、河村伝兵衛、原惣右衛門、岡本次郎左衛門、次の間には潮田又之丞、中村勘助、大高源吾、武林唯七、勝田新左衛門、中村清右衛門、堀部安兵衛、奥田兵左衛門、高田郡兵衛がいならび、安兵衛が江戸の同志を代表して意見をいった。

「太夫は、大体いつ頃御決行の御意見か、今日はそれを伺い度いものです」

「余のこととは違って、時期を予めきめることは出来ない。機会さえあつたら、いつでも決行すべきであるが、あせって尚早に事を計って、大学様に累を及ぼしてはならぬ。人臣として、御家の御名跡を、これが立てられるようであつたら立てなければならぬし、兎に角大学様の御安否を見届けるまで、輕率に動いてはいけない」

「けれども、それもいつまでも際限なく待っているというのは、士氣の上においても如何かと存ぜられます。これは期限を定めて待つことにしては如何で御座りましょう。われわれの所存では来年三月が丁度まる一年にも相成りますし、多分それまでには大学様御閉門も免ぜられ、若しそれまでに何も仰せなき時は、万事休すと見て敵状を見て決行いたす……として三月に期限をお許し願いたいのです。だからと延引いたしておるのでは、同志の結束にも不利で、なにとぞ三月とおきめ下さい」

安兵衛は熱心にこういった。

「三月……」

内蔵助は、腕を組んで、考え込んでいたが、

「それもよからう。では、三月まではこのまま形勢を見て、それから準備にかかることにしよう」

といった。

これを聞いた次の間の人々は、雀躍をしないばかりによるこんで、面を輝かした。

「では、来年三月になりましたならば……江戸は世間の耳目をひ

く虞おそがござるゆえ、その際、早々上京いたし、重ねて御指図を受けることに致します」

と、安兵衛がいえば、内蔵助も頷うなづいた。

三月はまだ早過ぎると思うが、三月から準備にかかるという意味で、内蔵助は江戸の同志の主張を容れたのである。

世間の期待にそむいて内蔵助が間もなく京へ帰ってから、元禄十四年も押詰まって十二月十二日に、吉良上野介は願いのまま隠居を許され、養子の左兵衛ひさひょうゑが家督を継いだ。

「上野介殿が無事に隠居を許されたのは、最早御公儀が上野介殿に何のお咎めも御処分も加えない証拠だ」

江戸の同志は、また、あせり出した。急進派の原惣右衛門が大高源吾を連れて京に馳せ戻って、毎日のように山科の家を訪れて断行を促した。内蔵助は、この一徹な老人を撫めるのに、腹の立つほど骨を折った。惣右衛門は大坂へ落着いてからも、幾度となく長い手紙を寄越して来ている。

吉田忠左衛門の発案で、上方にいる同志だけの集合を山科に催した。江戸の同志の急進論に従うべきか否やをきめよう、というのである。

この席でも内蔵助の意見は、例によって変わらなかった。大学殿の御安否がきまらないことであるから、今日まだ時期ではないというのである。

原惣右衛門は、抑えていた不平を遂に爆発させた。

「太夫……」

「……………」

「御家御取立ての仰出がある時は、太夫は何となされますか？」

その時は、なまじいにわれ等先方へ手の出しようがなくなるではありませぬか？ やむを得ぬ事とあきらめることは惣右衛門は出来ませぬ。惣右衛門の存じ寄りは、大学殿、先君の御面目となるだけの御処分を見て腹掻き切つて死ぬか……あるいは、この際一挙に事を決して上野介殿の首級を頂戴にあがるか、二つに一つじや。方々は何んと思召されてか？」

大高源吾、潮田又之丞、中村勘助などは、

「原氏の申されるところ御道理だ」

「御同意、御同意」

と口々に申出た。

内蔵助は、自分にはかなり好い理解者であった惣右衛門が、急に変わったことで、黙然と腕を組んでいた。思慮ある年配の者でさえ思い詰めてこれまでに熱狂しているとすれば、血気の若者達が動揺するのは無理ならぬことであった。

内蔵助は、無言でいたが、またいった。

「そりゃア私だって、いざとなれば、志しのあるところを明らかにして腹を切る覚悟でいる。これは大学殿が充分われわれが満足する高知高禄のお取立てであった時のことだ。……だが、これはむずかしからう。また、なまじいのお取立てならば、御名跡を存して却ってお家の恥辱となることだし、その時はお家を潰す覚悟で、

吉良家へ推参仕るだけの話ではないか？ 待て、私が、こうして出来そうもないことを待っているというのは、万一それが叶うことがあろうかも知れぬと、はかない希望を持っているからだ。左様なものは捨てろといわれるだろう……また、私もどれ程これを捨てて、ひと思いに一挙に出たいか……そこは、なにも、方々と寸分の違いはない」

きっぱりとこういって穏かな顔付で、座を見まわしたが、

「これに期待を掛けているのは、これが臣子の勤めだと思うからだ。たといえうに足らぬわずかな機会であっても、われわれの我意によつて、これを失ってしまうのは如何か？ 第一にこれを考える。次に、延引の理由としているものは、軍略上未だその時機でない信じているからだ。ただ乱入する分ならいつでも出来ようが、今やつては恐らく十の中五つまでは本望を遂げることとは難かしからうと思う。左様なことがあつては拭い難き恥辱だ。万全を期して充分支度したい。こう思つて自分でも抑制している。党の一致は破りたくない」

流石に、惣右衛門も、内蔵助の意見が道理になつてゐるのを認めないわけには行かなかつた。

「しかし、また延引と申せば、士氣の沮喪をまぬがれますまい」といつて出た。

「それも致し方ないことだ」

と内蔵助は答えた。

「延引によつて変わるような忠節ならば、あつてもなくても同じ

ことだろう。逆に、最後に残つた者が真に頼るに足る人々だということとは申せよう。そういう人々が集まれば何事でも望んで成就しないことはなからうと思う。どうだろう。この考え方があやまつているか？ 意見があつたら遠慮なく承ることにしよう」

「いや」

と惣右衛門は、それまでの自説を捨てるのを寧ろ悦んでいるように微笑しながら、列座の人々にも目を遣つた。

分 裂

本所松坂町の吉良上野介の屋敷とは、石を投げてとどく相生町二丁目、米屋五兵衛という店が出来て、米穀を中心に小切を売つていた。主はもと富沢町で小切屋をしていたので、米屋は新しく店びらきをしたのだが、相変わらず小切を売って、朴訥で腰のひくいおとなしい性質が、付近の人々（中には吉良家の家中の者もいる）に可愛がられていた。

この主の五兵衛が、いつものように糠だらけになつて米の袋をかきいで、矢之倉富沢町の路地へ入つて小さい家の裏木戸をあけた。

「こんにちは……毎度有難う存じます。米屋で御座います」

「おお」

と茶の間から立って来たのは、堀部弥兵衛だった。

「こりゃアどうも……」

と、恐縮そうに立って出て来て見ている間に、米屋は、草履をぬいで上って米櫃の中へさーッと音を立てて袋の米を流し込んだ。同志の一人、前原伊助だが、実を知っている弥兵衛には、両刀のない腰が変にさびしく見えるだけで、たれが見ても何年も糠だらけになって働いていた人間のように取れるのである。

「毎度まことに恐縮じゃ」

弥兵衛は齒の欠けた口をあけていった。

「そんな御挨拶は御無用に願います」

伊助も笑って、そのまま上り端の板の間へ腰をおろしたが、

「その後何か耳よりなお話は御座いませんか？」

「ないのだ。春が来て、老人が棺桶に近くなったただけだ」

「御冗談……」

「いや、そうでない、心細いよ。三月にかかるという話が、またぐずぐずに延引になるらしい。太夫は、私が一体いくつに成ったか忘れているらしい。考えれば考えるだけ気が気でない。失礼する。こちらへ入りたまえ」

弥兵衛は茶の間の炬燵の蒲団をまくって、両脚を突っ込んだ。

「けれど、粉だらけですから……」

「まあ、いいさ、話もある」

「じゃアお庭へ廻りましょう。その方がいいでしょう」

伊助は、家について廻って、南を向いた日あたりのいい縁側へ

来た。

「年寄りのひと月というものは、若い者の五年や十年にあたるものだ。冷光院様三年忌までには何とかするというのは、あきらめて遠慮なく先へ死んでくれというのと同じことじゃないか？」

「いや御老体など、まことに矍鑠たるものですから……」

「そうは、いつていられないのだ」

弥兵衛は不機嫌だった。

「どうも、太夫は昔から気が長すぎるよ。こういうことは思い立ったのが吉日で、ばたばたとやってしまわないといけないものだ。去年の約束の三月期限がまた流れそうなので、若い連中が騒いでいる。結構なことだ、大いにやれと昨日も武庸に話したところだ。なんでも二十人同志がいれば、それで出来るから、ひと思いに自分達だけでやろうかという話が持ち上っているそうさ。武林、奥田、高田というような豪傑連だ。私も、その時は無論出て行く。あんたも来い。太夫はいつまで待っても動きそうもない」

「さあ、それは……如何でしょうか？ 私のさぐっただけでも、あちらでは三か所も見張所を置き、ずっと不寝番（ふねばん）しておるようなわけで、なかなか油断がありませんから……その油断がこちらに出るのを待っておられるのではありますまいか？」

伊助は、おとなしく、こういった。

「いくら、嚴重に守備をかためたところで、当節のなまくら武士ども、一撃するのに手間は取れぬ。太夫は慎重に過ぎる。相手にもよるのだ。たかが高家の一屋敷を踏み潰すだけの話だ」